



Unnamed Memory

- CLOSED STORIES -

The Dream of a Butterfly

—彼の魔女の恋愛下手は、
筋金入りだ。



「オスカー、ちよつといいですか？」

森の中の屋敷は平穏な午後の只中にある。その平穏を、読書をして過ごしていたオスカーは、やってきた妻の声に顔を上げた。ティナーシャは書き付け用の紙を手に、長椅子の隣に座ってくる。何の用事があるのか、彼は本を閉じると妻の頬を撫でた。

「どうした？ 何かの遊びか？」

「結婚までの手順を教えてください」

「ん……？」

よく意味が分からない要請に、オスカーは怪訝さを面に出す。だがすぐに彼は、妻が何を知らなかったのか思い当たった。転生を繰り返す彼らの運命において、記憶のない彼に対するティナーシャの行動には、いささかどころではない問題があると指摘したばかりだったのだ。「何歳であつても貴方ならば関係ない」と言い切った魔女に、きつく注意をした記憶はまだ新しい。オスカーは、真剣な面持ちの妻を見下ろした。

「なるほど。俺を落とす手順を知りたいのか？」

「です」

書き付けを取ろうとしているところがまず不安だが、彼本人の意見を聞き取る気があるだけまじだろう。オスカーはよくよく考えると、彼女にも分かりやすく、実行しやすく、ある程度応用性の効く手段を考え始める。そうして伝えられる内容を、ティナーシャは真面目に書き取っていった。

——その書き付けがいつ実行に移されるのか、オスカーは不透明な未来に思いを馳せる。

『その一、十五歳以下の相手に接触してはいけない。面識を持つならば外見を変え、出来るだけ肉体的な接触は避けること』

イエルドの周囲が激変したのは、彼が十六歳になった時のことだ。

平穏な田舎町にて武器職人の息子として育った彼は、自分もいずれ父親の後を継ぐのだろうと思っていた。その一環として武器の取り扱いは一通り身につけていたが、まさか自分がその技術を以って何かと戦うことになるとは思ってもみなかった。

十六歳の誕生日の日、ふらりと訪ねてきた馴染み客に、銃口を突きつけることになったイエルドは混乱する思考を整理しようとする。

「で、お前は何なんだ」

「ですから、貴方の知っているアグネですよ。今まで散々話したじゃないですか」

「アグネは普通の女だ。お前みたいな魔物じゃない」

彼の目の前で知己から変貌を遂げたその女は、尋常ではない美貌の持ち主だった。姿を変えたところからしても、おそらく人間ではないだろう。間違いなく魔物の類だ。これは既に、ア

グネは犠牲になってしまったのかもしれない。少年はいつも優しくかった女の姿を思い出し、奥歯を噛み締める。

「よくもアグネを……」

「あれー？ 何か失敗してる？」

いささか暢気な声を上げる女に、イエルドは威嚇の意味も込めて引き金を引いた。顔のすぐ横を通り過ぎる弾丸に、しかし彼女は平然としたままだ。清んだ声が呟く。

「じゃあとあえず、二番目に移行で」

『その二、出会った後は、ある程度強い印象を与えつつ、いつでも会える環境を整えること』

「えーと、じゃあ、アグネは私がやつつけました！」

「やつぱりか、この魔物！」

「いつでもかかってくるといいですよ！」

「今殺してやる」

女の顔を狙って、イエルドは更に引き金を引く。だが彼女は軽く右手を上げただけでその弾を防いだ。空中で静止した弾丸は、本来の十分の一程の破裂音を上げて消え去る。少年はその現象に驚愕しつつ、工房の床を蹴って女へと追った。銃身を女を打ち据えようと振りかぶる。彼女は向かってくる銃身を、何処からか抜いた短剣で弾いた。

「え、あれ、何かやつぱり悪化してませんか？」

「余所見するな」

懐から何かの書き付けを取り出そうとする女に、イエルドは蹴りを放つ。彼女は慌ててそれ避けると、空中に浮かび上がった。小さな紙を取り出して読み始める。

「オスカー、何かおかしいですよ……」

「そこを動くな魔物」

新たな弾丸を装填する間に、女は書き付けを読んでしまったのか懐にしまいなおす。騒ぎを聞きつけたのか、工房に面した路地には近所の間人が集まりつつあった。

『その三、極端な攻勢は避け、適度な距離を保ちながら、便宜を図っていく。好意があるということを間接的に示すこと』

「いいから下りて来い！」

空中に浮かぶ女に弾丸は当たらない。全て避けられるか止められるかだ。

そのことを四発撃って悟った少年は叫んだが、彼女は必死な顔でかぶりを振るだけだった。

「絶対下りませんからね。ここから話をしましょう。何か困っていることかありませんか？」

「お前が下りてこなくて困ってる」

「適度な距離が肝要なんです」

「馬鹿にしてるのか？ 何しに来た」

「こつちから攻撃も駄目なんですよ。ええと、貴方に喜んで欲しいので」
宙に浮かぶ女はうろたえているようにしか見えない。集まってきた人々が口々に「何だ」
「どうしたんだあれ」と囁きあつた。彼女と会話している為、巻き添えで注目を浴びているイ
エルドは思い切り顔を擧める。

「俺が喜ぶ？ 何、寝言言ってるんだ」
「あれー？」

『その四、反応がかんばしくない時は、思い切って引いてみる。ただし引き
すぎて繋がりが切れないように、何らかの接点を保っておくこと。出来れ
ば興味を持って会いに来させるようにしむけてみる』

「とりあえず、今日のところは退いてやりませよ！」

「逃げるのか、魔物！」

「私を倒したくば、北の山に来るといいです！ 来なければ、えーと、この町を滅ぼしますよ！」
「させるか！」

イエルドは近くの壁を蹴つて、宙に浮かぶ女へと手を伸ばす。

しかし彼女はふわりとそれをかわすと、更に高度を上げた。黒い髪が宙に広がり、不吉な影
を路地に落とす。異様なその姿に人々は戦き、女たちは悲鳴を上げた。怒りに染まった目の少
年に向かって、女はくすくすと笑う。

「では、会いに来てくださるのを待っています」

その言葉を残して、女の姿は掻き消える。

微かに残る甘い香りに、少年は苛立ちも頭に石畳を蹴った。

書き付けは全部で十の項目から出来ていた。

その十番目『どうしても駄目な時は、これを見せて正直に謝って気を引きたかったと白状す
ること』を実行したティナーシャは、呆れ果てた少年の目を受けてうなだれる。

「そ、そういうわけでして……」

「馬鹿か」

「ちよつとした行き違いが」

「行き違いすぎだ。馬鹿か」

最初の決裂から約三ヶ月。

その間に北の岩山に城を建てたり、イエルドを含めた町の間人と小競り合いを繰り返したり、
罫を張ったり破られたり、しまいには城からの正規軍がやってきて地形の変わる争いに発展し
たりしたティナーシャは、石床に膝を抱えて座り込んでいた。

半ベそをかいている女の前に、書き付けを渡されたイエルドは大きな溜息をつく。これだけ
の騒ぎにもかかわらず死人が出ないことはおかしいと思っていたが、書き付けの中には十の項
目とは別に「基本的に入死には出さないこと」という注意書きがちんと書かれていた。恋愛

についての助言においてどうして人死について言及されるのか意味不明だが、おそらくは彼女の強大な力と、おかしな思考回路を制限する為だろう。彼は書き付けを丸めて捨てたが、ひとまずそれを彼女に返した。

「で、俺の気を引きたかったと」

「そうなんです」

「確かに殺意は引けたな」

「もう最初からおかしかったですよね……。でも軌道修正の仕方が分からなくて」

「余計悪化した。つてか、助言の解釈がおかしすぎだろ」

「流れを大事にしてみました」

「他にもっと大事にすべきことがあった」

冷たく言い放つと、女は更に縮こまる。濡れた猫のようにしょんぼりしたその姿を見て、彼は溜息を一つつき——だが何だかんだ言っただが惹かれてしまった女を、腕の中に抱き上げた。

白い手がそつと彼の髪をかき上げる。作られた世界から彼の意識を引き上げる手。オスカーは妻の手を掴み取ると臉を上げた。見慣れた寢室の天井。魔女が膝の上の彼を覗き込む。「——どうでした？」

試行を映し出す夢。虚構の魔法から脱したオスカーは、妻の頬に手を添えて頷いた。

「やっぱり駄目だ。あの書き付けは破棄で」

「ええ……？ どうしてですか。分かりやすいと思うんですけど」

「いや、お前は変に曲解した上、場の空気に流されそうだからな」

「なんでですかそれ。私、そんな馬鹿じゃないですよ」

「馬鹿というか。下手だな。下手」

いくつかの条件を指定して構築した未来は散々なものだった。あれが現実となったなら、人死には出なくても歴史に嫌な騒動が残ってしまう気がする。オスカーは不満げな妻をよそに寝台傍のテーブルに手を伸ばすと、そこにあつた書き付けを焼却した。そうして改めて頬を膨らませる妻を腕の中に抱き取る。

「まあ……あまり考えるな。適当でいい。結果は同じだからな」

「同じってなんですか」

「愛している」

目を丸くする妻の顔に口付け、オスカーは微笑む。

不透明な未来は不透明なままで、だがそれは少しだけ甘やかな期待を孕んでいた。

「とりあえず魔王とかにはなるなよ。面倒なことになるからな」

「どうしたら人を口説く過程で魔王が発生するんですか……」

「俺を何歳だと思ってるんだ」

呆れて返した質問に、彼女はくすくすと笑うだけである。オスカーは彼女の隣に座ると、濡れた髪を指に絡めた。そのまま軽く引くと、女は底の無い目を契約者に向けてくる。

「邪魔しないでくださいよ。本当に貴方は子供みたいなんですから」

「自分の年と比べて、子供扱いするのはやめろというのに」

四百歳以上の彼女と比べられては、ほとんどの人間が子供になってしまふ。オスカーは彼女の手の中から本を抜き取ると、それを濡れない場所に置いた。不満げな声を上げる魔法を無理

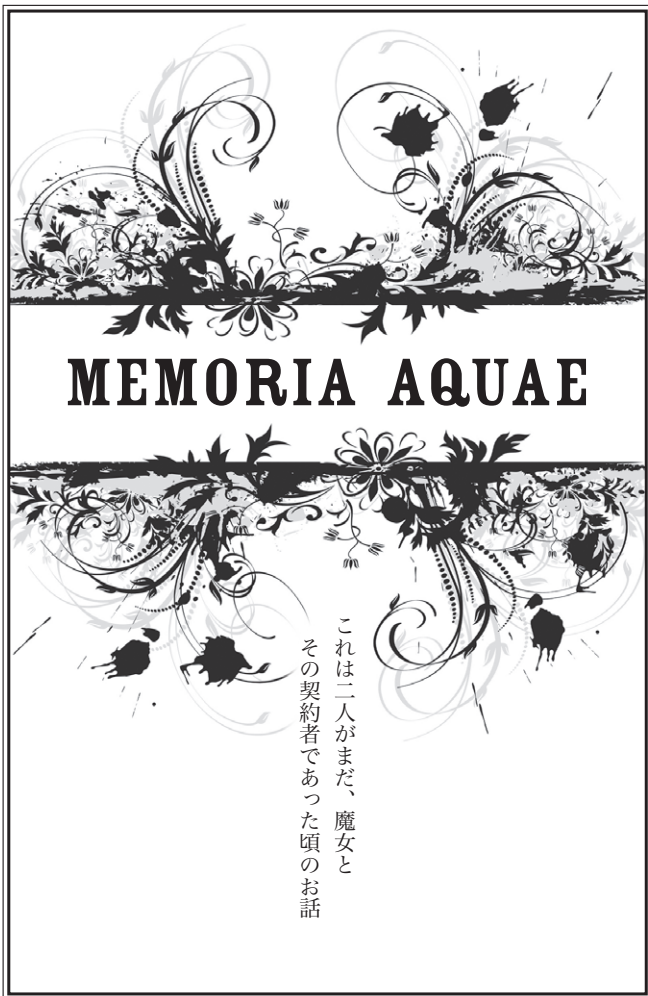
森の中にあるその湖は遠浅で、澄み切った透明な水の下には、角の取れた小石が無数に敷き詰められている。近くの村に伝わる昔話では、これらの石は湖底に棲む水妖が、月晶石を真似て一つずつ磨いたものなのだという。その話の真偽はさておき、丸い石ばかりの水際は素足で歩くにはちようどよいものだった。そうして辺りを散歩していたオスカーは、元の場所に戻つてくると、水辺に寝そべっている魔法を見下ろす。

「風邪を引くなよ」

「平気ですよ。多分」

黒いドレスを着たティナーシャは、浅瀬で腹ばいになって小さな本を読んでいる。東ねられていない長い髪と、同じ色の服が水中に薄く広がり、まるで大輪の黒花が水辺に咲いているようだ。魔法は両肘を小石の上について上体を起こし、手元で頁を捲りながら男を見上げた。

「それより、あまり遠くに行かないでくださいね。迷子になったら困ります」



これは二人がまだ、魔法とその契約者であった頃のお話

矢理膝の上へと抱き上げる。ティナーシャは溜息をついて男の胸に背を預けた。

「子供みたいなことをするから子供扱いなんですよ。これで王なんですから困ったものですね」
「仕事はしてるぞ」

「そうですね。その調子で私事においても大人になつて欲しいものです。……痛い」

言い終わるか否かで頬をつねられた魔女は、形のよい眉を上げる。反撃しようと水を掬いあげる白い手を、オスカーは先手を取つて抱き込んだ。両腕を体ごと拘束された女はむきになつてじたばたと暴れる。無言での攻防は、しかしそう長くは続かなかつた。ぶすつとした顔で大人しくなつた魔女に、彼が何を言おうかと思ひかけた時、すぐ傍で大きな水音が上がる。

「……ん？」

逃げる間も避ける間もない。巨大な手の如く跳ね上がった湖水が、二人の上に降り注ぐ。それは元々ほどほどに濡れていた彼らを、完膚なきまでにびしょ濡れにした。嘩然としているオスカーに向けて、魔女が快哉の声を上げる。

「意地悪するからそうなるんですよ！」

「……どっちが子供なんだ」

振り返ると、置いてあつた本も巻き添えを食つていた。無詠唱で水を操つたのだろう彼女は、それに気づいて悲鳴を上げる。

「あああああ、しまった！」

「だからすぐ魔法に訴えるなというのに。王妃になつた後に困るぞ」

「ならない！ なるわけがない！ 湖に沈めますよ！」

「契約者を殺そうとするな。守護しろ」

とかくこの魔女は、口煩く彼を叱る割りに、自分も出来た性格をしているとは言えないのだ。彼は腕の拘束を解くと、代わりに女の顔へと手を伸ばした。水が滴る前髪をかき上げ、睫毛の上に溜まつた水滴を拭つてやる。ティナーシャは撫でられる猫の目で、うつとりと男を見上げた。彼女のそのような表情は知り合つたばかりの頃はまず見られなかつたもので、半年以上かけて少しずつ縮めてきた距離を、オスカーに実感させる。彼は濡れた額に口付けて笑つた。

「塔に戻つてもつまらないだろう。このまま俺の傍にいればいい。退屈はさせないぞ」

「退屈はしなそうですけど、すごく苦勞の予感が……」

普通の人間を凌駕する経験を持つはずの彼女は、げつそりした顔でかぶりを振る。

「一年足らずでこの苦勞ですからね。貴方と添うと早死にしそうです」

「とんでもないことを言うな。俺が死ぬまで生きてろ」

「と、言われましても。もう生きる必要がないですから……」

闇色の瞳が空を仰ぐ。彼女がそうして追うものは、とうに死んだ同胞の魂なのかもしれない。今は解放されたそれらの魂は、世界に溶けてきつと何処にでも在る。ティナーシャは自分もその一部になりたいと、願っているように見えた。

出会つた頃と比べて何処か漂白されてしまった魔女。遠くを見る目を引き寄せようと、オスカーはもう一度その髪を手繰る。口付けた一房は、微かに花の香りがした。

「必要がないはずがない。俺が必要としてるから、もうちょっと生きとけ」
 「無茶苦茶言いますね」

「あと五十年か？ ああ、何百年でもいいぞ。お前と一緒に面白そうだ」

「何百年で、そんな」

女の目が彼を見る。

そこに映るものは孤独だろうか、切望だろうか。

オスカーは、自らの知らぬそれを理解したいと思う半分、彼女は理解して欲しくないのだからとも直感した。美しい貌が微笑もうとして、ほろ苦く歪む。

「疲れちゃいますよ、そんなの」

——馬鹿ですね、貴方。と、ティナーシャは零す。

翳を宿して伏せられた目は、けれど少しだけ嬉しそうだった。寄りかかってくる女の頭をオスカーは撫でる。

「二人なら気も紛れるんじゃないか？」

「貴方の世話を何百年もするのとか、ごめん蒙りたいです」

「じゃあ俺が世話してやる」

「何か響きがやだ！ つてか、何処触ってるんですか！」

「濡れ猫みたいで可愛いな」

「猫は濡れるの嫌いなんですよ！」

腕の中で暴れる魔女をオスカーはしばらく捕らえて楽しんでいたが、彼女が肩で息をつき始めるとさすがに放してやった。途端全身から水を滴らせて、ティナーシャは空中に浮き上がる。彼女はそのまま宙でくると回転すると、森の向こう、沈み始めた日を眺めた。

先程まで広がっていた明るい青空は、いつの間にか薄紫に変じつつある。無理矢理に空けてきた予定もそろそろ限界だろう。オスカーは水辺から立ち上がると、半分溶けかけた本を拾い上げた。持ち主に返そうと、空を見たままの女を呼ぶ。

「ティナーシャ」

彼女はけれど、振り返らない。宙に留まったまま変わっていく空の色を見つめている。オスカーはかろうじて届く彼女の手を、背伸びして掴んだ。

「ティナーシャ、帰るぞ。いい加減風邪を引く」

引き寄せた体は普段よりは重い。髪と服がたつぷりと水を吸っているせいだろう。彼の腕の中に収まった魔女はしばらくの間沈黙していたが、やがて泣き出しそうな微笑を見せた。水晶のような声が、歌に似て響く。

「あと何百年もなんて、疲れますよ」

「そうか」

「だから数十年だったら、一緒でもいいです」

「——は？」

予想外の答に、オスカーの思考は一瞬止まった。

その間に、魔女はするりと身を振る。白い両腕を彼に向かつて投げかけた。「一緒にいいです。こんな私を御せるのは、きつと貴方だけでしようから。——私の王」白い貌が寄せられる。重ねられた唇は甘く、何故か少しだけ血の味を思わせた。それが彼女の持つ時の重みなのだろうと、オスカーは思った。

無数の繰り返し。形を変え、言葉を変え、重ねられた誓い。

その中において捧げられるものはいつも愛情で、委ねられるものは命であったのだろう。

彼はいつも、それらを受け取ってきた。受け取って、応えてきた。遠い未来、いつか来るのだろう。終わりを意識しながら。それでも彼女が幸福であればいいと。

今はまだ眠る記憶を知らぬままに、オスカーは彼の魔女を抱きしめる。

「何だか……口説き落とすのに大分苦労したからな。実感が湧かない」

「なくていいですよ、実感なんて。っていうか、記憶消してあげます。また明日振り出しから始めましょう」

「何の嫌がらせだ、それは」

「貴方は猫を洗いそうだからです」

首を凍める彼女は、だがすぐに相好を崩すと契約者に抱き付く。

ふつと洩らされた息は安堵と幸福に満ちて、その時彼らは、少しも孤独ではなかった。

2011/09/19 Project Silent-Candy 発行

印刷 緑陽社様
DTP 風間由香様
material ©F-work, ©bordeur, ©sabri deniz kizil -Fotolia.com
mail dilsh@unnamed.main.jp

Special thx 風間様, Staff all

そしてご購入くださった皆様、ありがとうございました！

